

<翻訳>アンリ・サン=シモン組織者(1)

著者	廣田 明
雑誌名	社会労働研究
巻	31
号	1-2
ページ	37-76
発行年	1985-02-20
URL	http://hdl.handle.net/10114/00018321

アンリ・サン＝シモン

組織者(1)

廣田明訳

『組織者』の出版経緯について

以下に四回の予定で訳出されるものは、サン＝シモン (Claude-Henri de Rouvroy Saint-Simon, 1760～1825) の代表的著作の一つである『組織者』(*L'Organisateur*, 1819～20) の出版された部分の全体である。本書は、一八一九年十一月から翌二〇年の二月にかけて、『組織者』のタイトルを付して、分冊の形で順次出版された。全体は十四編の手紙から成っている。『組織者』については、これ以外に未公刊の手稿 (Fragment de *L'Organisateur*) の存在が知られている。^[1] これらの手稿のうち現存する部分は、著者による修正箇所が数ヶ所しかなく、そのまま印刷可能な状態になっているだけでなく、内容的にも『組織者』の出版部分を補完する部分や、従来の本書の解釈に再検討をうながす部分 (例えば後期サン＝シモンの歴史理論に関連する部分) を含んでいるが、今回の翻訳ではこれらの手稿は割愛せざるをえなかった。

組織者(1)

翻訳にあたって底本としたのは、サン＝シモニアンの手で十四年の歳月をかけて刊行された『サン＝シモン、アンファンタン著作集』(*Oeuvres de Saint-Simon et d'Enfantin, procédés de deux Notices Historiques et publiées par les membres du Conseil institué par Enfantin pour l'exécution de ces dernières volontés*, Paris, Ed. Dentu (1865~75) et Ed. Leroux (1877~78), 47 vols. (以下では O. S. E. ないしは『著作集』と略記))、巻数はローマ数字で表記する)である。『組織者』はこの『著作集』の通巻 XX 巻(一八六九年刊)に、*L'Organisateur*, Par Henri Saint-Simon. De Novembre 1819 à Février 1820 と題して収録された。この『著作集』では『組織者』は一巻本の体裁をとっているが、そうなのは編者たちの配慮によるものである。

『著作集』の編者は本書について、『組織者』は、その分冊が相次いで出版された際の混乱のために、サン＝シモンの出版物の中で恐らく完全な収集が最も困難な出版物である」(O. S. E., XX, p. 9)と述べている。そこで、この『著作集』に付されている編者の書誌的注釈の部分に依拠して、マッソーネ夫妻のサン＝シモン書誌をも参照しながら、以下に『組織者』の出版経緯をまとめておくことにした。そしてこの出版経緯をふまえ、それをできるだけ再現できるような形で、この翻訳の掲載区分を決めることにした。^[3]

サン＝シモン『は組織者』の出版に先だって、一八一九年一月頃から、A・コント等数名とともに「文人協会」の名において、『政治』と総称されている共著の出版を開始したが、この企画は同年の五月に第十二分冊の刊行をもって打ち切られた (*Ibid.*, XIX, pp. 187~192. Mazzone, pp. 25~28. 出版分は全体で六〇六ページになる)。さらに同じ月に「歳出予算案に一条項の追加を要求するための請願に関する考察」(*Ibid.*, XX, p. 5)と題される一〇ページの小品を公刊した後、かれは、この年の八月に『組織者』の趣意書」(*L'Organisateur. Prospectus de l'Atueur*)

を発表して、新たに半定期的な刊行物を分冊で出版する計画を公けにしたのである。

「趣意書」はいくつかの定期刊行物に掲載されたが、それらには「甚しい異文(variante)」と内容上の精粗があることが確認されたので、サン＝シモンが数種の「趣意書」を出版元に送付した、と判断されるにいたった(*Ibid.*, XX, p. 9)。編者が『著作集』に収録した「趣意書」は、『ラ・ミネルヴ』(*La Minerve*)誌の、第八〇分冊(一八一九年八月の第二号)、第七巻、九五～九六ページに掲載されているものである。

次に『組織者』本文の出版状況を見ることにしよう。本書の第一分冊の初版が『組織者の抜粋』(*Extrait de L'Organisateur*)と題して公刊されるのは、一八一五年十一月のことである。これは三二ページの小冊子で、他の部分は手稿のままで手元に留保されていることが著者によって告げられている(*Ibid.*, XX, p. 9)。次に第一分冊・第二版が同年の十二月に刊行される。これは『組織者。第一分冊、第二版。二つの重要な手紙を増補』(*L'Organisateur. Première Livraison ; seconde édition, augmentée de deux lettres importantes*) (*Ibid.*, XX, pp. 9～10)と題されており、全体で四二ページを数えている。さらに同月中に、第一分冊・第三版が『組織者。第一分冊、第三版。新しい政治体制の粗描を増補』(*L'Organisateur. Première Livraison ; troisième édition, augmentée d'une Esquisse du nouveau système politique*)と銘うって、出版される。これは六つの手紙から成り、分量が全体で六二ページに増加した。今回、この翻訳で第一回分として訳出された部分は、この第一分冊、増補第三版の全体に対応している(『著作集』版の一三〇六一ページにあたる。但し^{オリジナル}原版と『著作集』版ではページづけが異なっている。以下も同様。)

第一分冊の刊行は第三版をもって終了し、翌年(一八二〇年)から第二分冊の出版が開始された。第二分冊には初

版と第二版があるが、両者の刊行の間には数日間しか経過しなかった、と言われている (*Ibid.*, XX, p. 11)。しかし両者の体裁、内容には大きな相違がある。第二分冊・初版は、第一分冊・第三版をうけて二つの手紙(「第七の手紙」と「第八の手紙」)によって構成されており、ページづけも第一分冊・第三版の次(六三ページ)から始まり、一一六ページで終わっている (*Ibid.*, XX, p. 10)。これに対して、「わたしは数日のうちにこの分冊の第二版を公刊するでしょう。この版はこの分冊「初版」よりもずっと分厚くなるでしょう」(*Ibid.*, XX, p. 10)とサン＝シモンが予告したとおりに、第二版では大量の増補がなされたのである。

第二分冊・第二版は初版と同じように第一分冊のページづけを継承して六三ページから始まり、二六五ページにおよんでいる。増補部分は一七ページから始まり、「第九の手紙」から「第十四の手紙」までの一連の手紙から成っている。『著作集』版では、「第九の手紙」が始まるのは一一一ページからであり、その前に短かい線(—)で区切って「この第二分冊の初版になされた追加」(Addition faite à la première édition de cette seconde livraison)と記されているから、第二分冊・第二版の原版の増補部分に対応するのは、『著作集』版では一一一ページ以下の全体 (*Ibid.*, XX, pp. 111~240) ということになる。そこで、翻訳の掲載区分としては、右記の点を考慮に入れて、『著作集』版の六一~一一一ページ(第七、第八の手紙を収録)までを第二回分とするのが妥当であると判断した。残りの部分(『著作集』一一一~二四〇ページ)については、一回で全てを掲載できれば、出版経緯をそのまま再現できるので最良であるが、一回で掲載可能な紙幅を考慮すれば、これを二回に分けるのが適当であろう。後者を採る場合、三回目と四回目をどこで区切るのが分量と内容のまとまりの点で妥当といえるかが問われなければならないが、ここでは、「第九の手紙」と「第十の手紙」(*Ibid.*, XX, pp. 111~185)を第三回分とし、残り(第十一~十四

の手紙)を第四回分とすることにした。その理由は、「第十一の手紙」には「社会組織理論にかんするわたしの著作の第二の抜粋」(Deuxième extrait de mon ouvrage sur la théorie de l'organisation sociale)と題される、サン＝シモンの社会組織理論の核心となる部分(「第一の手紙」の、いわゆる「サン＝シモンの寓話」に理論的に対応する部分)が収録されており、「第十の手紙」以前と「第十一の手紙」とでは理論的な抽象度が異なると判断されるからである(分量の点でもこの区分が妥当であろう)。

結局、『組織者』の出版された部分は、原版のページづけで二六五ページ(『著作集』版では二四〇ページ)になるが、第一分冊の第三版と第二分冊の第二版とが合本されて初めて一卷本として上梓されたのは、『著作集』においてであった(*Ibid.*, XX, p. 11)。第二分冊・第二版には出版年月日が記されていないようであるが、「第十四の手紙」の冒頭におかれた「同胞諸君、恐ろしい犯罪が犯されたばかりです。ベリイ公爵殿下が暗殺されたのです」という一文を典拠として、この出版が一八二〇年二月になされたと推定されるに到ったのである(ベリイ公の暗殺事件は二月十三日に発生した)。

『組織者』第二分冊の刊行は以上の経過の中で終りを告げたが、サン＝シモンは本書の続編の出版を断念したわけではなく、モンマルトル通り五六番地に「組織者編集局」(*Bureau de L'Organisateur*)を設けて、その出版継続の準備を進めた。かれの予告によれば、毎月一分冊が刊行され、一八二〇年の末までに本書が三巻本(*trois volumes*)として完成されるはずであった(*Ibid.*, XX, p.11)。しかし諸般の事情(財政事情や、「サン＝シモンの寓話」に起因する周知の裁判沙汰など)によって、この約束は反故にふされ、相当量の手稿(フランス国立図書館所蔵分で五三枚*feuille*)が未公刊のままに残されたのである。したがって、かれの『組織者』の構想を可能なかぎり原型に近い形で復

組織者(1)

元しようとすれば、少くとも右記の手稿の翻訳が不可欠となるであろう。しかし『組織者』の刊行部分がかれの社会組織理論の発展の中で重要な位置を占めていることは一般に承認されるであろうから、今回この部分のみをまず訳出し、初期社会主義、実証主義、産業主義・産業化論などに関連する古典的資料として役だてていただくことにした次第である。

注

[1] Hitoshi IMAMURA et Shuichi NAKAMURA, UN SOMMAIRE DES MANUSCRITS DE SAINT-SIMON conservés dans la Bibliothèque Nationale,

『東京経済大学学会誌』第一三七号、一九八四年九月を参照せよ。サン＝シモン手稿の存在は以前から知られていたが、わが国で、フランス国立図書館所蔵の「サン＝シモン手稿」の全体的構成を細部にわたって明確にしたのは、本稿が初めてである。わたしは、中村秀一氏より、氏が国立図書館でマイクロフィルム化された手稿の一部を閲読する機会を与えられた。記して氏の好意に対する感謝の言葉に代えさせていた

く。

[2] Alessandro Mazzone et Irmgard Haase Mazzone, *Oeuvres de Claude-Henri de Saint-Simon. Essai bibliographique*, Milano, Feltrinelli, 1963.

[3] 『組織者』の訳出部分をこの紀要で四回にわたって連載する際の、掲載分の内訳は以下の表のとおりである。

掲載区分	『組織者』の構成	原 版 (ページ)	『著作集』版のページ
第1回分	趣意書+第1～第6の手紙	第1分冊・第3版 (1～62)	6～61ページ
第2回分	第7の手紙+第8の手紙	第2分冊・初版 (63～116)	61～111ページ
第3回分	第9の手紙+第10の手紙	第2分冊・第2版 (117～265) (初版の増補部分)	111～185ページ
第4回分	第11～第14の手紙		185～240ページ

凡 例

一 この訳の底本となったのは、前記『サン＝シモン、アンファンタン著作集』（欧文タイトルは前掲）、第ⅩⅩ巻所収の一巻本（一八六九年刊）である。

二 傍点、は原文でイタリックになっている部分、ゴシック部分は太文字で組まれている部分である。

三 注のうち、注番号を（ ）で囲った部分は、原著者（サン＝シモン）ないしは『著作集』編者のものである。後者の場合には、注の末尾に編注と明記した。訳者の注は注番号を〔 〕で囲った。また、本文中〔 〕で囲まれた部分は訳者による補足ないしは注釈である。さらに、欄外の〔 〕は、底本のページづけを示している。

四 訳出にあたっては、全体が同時代人への呼びかけの手紙で構成されていることを考慮して、口語（話し言葉）を採用し、できるだけ平易な表現を用いるよう心がけた。しかし、本文中（ ）で囲まれている部分（この翻訳では△▽で囲った部分）と、著者の同種の作品が搜入された部分や他人の作品を転載した部分は、文語（書き言葉）で表現されている。

〔6〕 組織者。著者の趣意書

一九世紀はまだそれにふさわしい性格を全く受けとっておりません。われわれの哲学的文献を支配しているのは一八世紀の性格です。なぜならそれは本質的に批判的であることをやめなかったからです。

こうした事態の結果として、われわれはいまだに革命のなかにあり、新しい社会的危機に脅かされているのです。

なぜなら、なんらかの体制システム(したがって政治体制)は、それを覆した批判によっては取り替えられることができないからです。ある体制を取り替えるには別の体制が必要です。

一八世紀の哲学者が批判的でなければならなかったのは、迷信と野蛮の時代に作られた体制の不都合を暴露することに第一の課題があったからです。しかしこの体制はかれらによって完全に信用を失墜させられたのですから、かれらの後継者すなわち今日の哲学者の任務が知識の現状にふさわしい政治体制を発表しこれを論議することにあるのは、明らかです。またいまだに存在している(旧い体制から派生した)諸制度を取り替える手段に関する考えが十分に明確にされ、結びつけられ、整序され、それから世論によって是認されるまでは、旧い体制が完全に活動をやめることができないであろうことも、同じく明らかなことです。

これは、本書の著者がこの主題を長年にわたって熟考した末にもつにいたった意見です。

著者はこの意見を最もよく判断できる人々の検討に委ね、かれらの賛同を得ました。

一人の人間だけでは、人類が必要としている新しい政治体制を組織することはできません。したがって本書の著者は、われわれの実証的知識のさまざまな部門にいる最も有能な人々がこの仕事に協力できるようにするための方法を探求しなければなりませんでした。

かれが考えだした計画、かれの著作の中で説明される計画「の骨子」は、四つの部類に分割される学術団体を形成するところにあります。それは、これら四つの部類のそれぞれが他のすべてから独立に行動することができながら、なおかつそれらがいずれも体制の組織化に協力して同じ効果をあげるように、なすべき仕事の全体をそれらの間に配分することにあります。

そしてこの計画は数名の非常に尊敬されている学者の批判に委ねられ、かれらの賛同を得ました。敢えて言えば、かれらがそれをほぼ採用したと言うこともできるでしょう。

これが『組織者』の経緯です。

『組織者』の研究目的は次のようになるでしょう。(一)新しい政治体制に基礎として役だたねばならない諸原理を定立すること。(二)知識の状態に適合する社会理論を打ちたてることのできる、科学の作業場の組織計画を提示すること。(三)この仕事をできるだけ速かに遂行することが社会の全ての階級の利益になることを証明すること。(四)新しい体制を組織する間、公共の平穏を維持する手段を指示すること。

『組織者』の一般的目的は、社会の幸福がその解決にかかっているようなすべての問題を検討することになるでしょう。

[9] 『組織者』の第一分冊は来月(九月)公刊されるでしょう。そこでは、この著作のために採用される出版の方式と、予約申込の条件が告げられるでしょう。

[13]

アンリ・サン＝シモン 著

組織者

一八一九年十一月～一八二〇年二月

[15]

著者よりかれの同市民へ

『ミネルブ』⁽¹⁾誌に掲載された本書の趣意書で、わたしは先月中に『組織者』第一分冊を公刊することを約束しましたが、これを果すことができませんでした。この著作の冒頭に置かれるはずの研究に予想していたよりもずっと多くの時間がかかってしまい、わたしはそれが完了する時期を定めることができません。

(1) われわれが『ミネルブ』に公表された「趣意書」を特に再版に付した理由はここにある(編注)。

[16]

わたしはこの研究の抜粋のいくつかを公けにすることにします。第一の抜粋で、わたしは、社会の現状を全く有りの儘に説明し、第二の抜粋では政治体が冒されている病いを治療する手段について意見を述べます。第三の抜粋では、治療の実施に先だって、用心しなければならないことを指示します。

フランス、イギリス、ドイツ、イタリアは大きな不幸に脅かされています。これらの国々ではどこでも今にも内乱が勃発しそうですし、同時にヨーロッパでは全面戦争が勃発しそうです。もしも恐るべき戦禍がふたたび発生し、わ

れわれの都市を荒廃させ、まだ屍でおおわれている農村を破壊するならば、それは、社会組織の問題が十分急速にも、十分完全にも説明されなかったためである、と言えるでしょう。なぜなら、人々が戦うのは、かれらが互いに理解し合えない場合だけなのですから。

わたしはこの問題の最も重要な点を説明したと信じます。この点についてはわたしには確信がありますので、この主題に対するわたしの研究の成果をできるだけ早く諸君にお伝えするのが市民としてのわたしの義務なのです。

〔17〕 同市民諸君、どうかこの不眠不休の最初の成果を友情と寛容をもって受け入れて下さい。わたしはできるだけ早い機会に、わたしの研究の全体を諸君の手に委ね、それを諸君に献呈できるようにしたいと思っています。

アンリ・サン＝シモン

フランス市民、ヨーロッパ協会・アメリカ協会員

追伸。公衆がこれらの抜粋のそれぞれについて順次判断を下すのに必要な時間的余裕をもつことができるようにするために、わたしはそれらの公刊に間隔を置くことになるでしょう。

『組織者』の第一の抜粋

フランスが次に挙げるようなこの国の最良の人々を突然に失ったと仮定してみよう。すなわち、最良の物理学者五

組織者(1)

○名、最良の化学者五〇名、最良の生理学者五〇名、最良の数学者五〇名、最良の詩人五〇名、最良の画家五〇名、最良の彫刻家五〇名、最良の音楽家五〇名、最良の文学者五〇名。

[18] 最良の機械技師五〇名、最良の土木技師と軍事技師五〇名、最良の砲兵五〇名、最良の建築家五〇名、最良の内科

医五〇名、最良の外科医五〇名、最良の薬剤師五〇名、最良の船員五〇名、最良の時計師五〇名。

最良の銀行家五〇名、最良の商人二〇〇名、最良の耕作者六〇〇名、最良の鉄工場主五〇名、最良の武器製造業者五〇名、最良の皮鞣し工五〇名、最良の染物師五〇名、最良の坑夫五〇名、最良のラシャ製造業者五〇名、最良の綿織物業者五〇名、最良の絹織物業者五〇名、最良の亜麻布製造業者五〇名、最良の金物製造業者五〇名、最良の陶磁器製造業者五〇名、最良のクリスタル製品とガラス製品の製造業者五〇名、最良の船舶艤装者五〇名、最良の運送業者五〇名、最良の印刷業者五〇名、最良の彫版師五〇名、最良の金銀細工師と他の金属加工師五〇名。

[19] 最良の石工五〇名、最良の大工五〇名、最良の指物師五〇名、最良の蹄鉄工五〇名、最良の錠前工五〇名、最良の刃物師五〇名、最良の鋳物工五〇名、そしてここに指示されてはいないさまざまな職業に就いて、学問、芸術、工芸の分野で最も能力のある他の人々一〇〇名、つまり、フランスの最良の学者、芸術家、アルチザン⁽¹⁾を構成している全体で三千名の人々をフランスが突然に失ったと仮定してみよう。

(1) 通常アルチザン (artisan) によって指示されるのは単なる労働者 (ouvrier) だけである。回りくどい言い方を避けるためにわれわれはこの表現によって物質的な生産物に関与しているすべての人々を意味させることにしたい。すなわち、耕作者、製造業者、商業者、銀行家、およびかれらに雇われているすべての使用人ないしは労働者を意味させたい。

〔20〕 これらの人々はもつとも本質的に生産的なフランス人であるから、つまり最も重要な生産物を与える人々、国民にとって最も有用な労働を指導し、学問、芸術、工芸の分野で国民を生産的にする人々であるから、かれらはまことにフランス社会の華である。かれらはすべてのフランス人のうちでかれらの国に最も役だつ人々であり、この国に最大の榮譽を得させ、その文明と繁栄を最も促進させる人々である。かれらを失なうや否や、国民は途方に暮れてしまうであろう。フランス国民はたちまち今日自分の競争相手となっている諸国民に対して劣勢の状態に陥いるであろう。

そしてその喪失を償わない限り、また新たな首脳部が生まれない限り、フランス国民はこれらの国民に従属し続けるであろう。フランスがこの不幸を償うためには、少なくとも一世代の全体が必要になるであろう。なぜなら、実証的な有用性をもつ仕事で抜きんでる人々は真実の異例であって、自然は異例とりわけこの種の異例を惜しみなく与えてはくれないからである。

もう一つの仮定に移ろう。フランスが、学問、芸術、工芸の分野の天才は一人も失わずにいるが、王弟殿下、アン・グレアム公爵殿下、ペリイ公爵殿下、オルレアン公爵殿下、ブルボン公爵殿下、アングレアム公爵妃殿下、ペリイ公爵妃殿下、オルレアン公爵妃殿下、ブルボン公爵妃殿下、ド・コンデ内親王を同じ日に失なうという不幸にみまわれたと仮定してみよう。

〔21〕 同時にフランスがすべての宮廷の高官、すべての（有任所あるいは無任所の）國務大臣、すべての参事院〔國務院〕評議員、参事院請願委員、すべての元師、すべての枢機卿・大司教・司教・副司教・司教座聖堂参事会員、すべての知事と郡長〔副知事〕、すべての各省職員、すべての裁判官、そしてこの他に貴族のような暮らしをしている人々のうち最も裕福な所有者一万人を失ったと仮定してみよう。

この災難は確かにフランス人を深く悲しませるであろう。なぜならかれらは善良であり、これほど多数の同胞の突然の死を平然とながめることはできないであろうから。しかし国家の要人とみなされている三万人の人々のこの喪失によってかれらに引き起こされる悲しみは純粹に感傷的なものにとどまるであろう。なぜならこの喪失の結果、国家にとっていかなる政治的損害も生じないであろうから。

第一に、欠員となった地位を埋めるのは極めて容易だからである。王弟の職務を王弟殿下と同じように行なうことのできるフランス人はたくさんいる。多くのフランス人は王族の地位に就いて、アングレーム公爵殿下、ベリイ公爵殿下、オルレアン公爵殿下、ブルボン公爵殿下と全く同じように適切に振まうことができる。多くのフランス女性は、アングレーム公爵妃殿下、ベリイ公爵妃殿下、オルレアン、ブルボン、コンデの各妃殿下と同じように立派な公爵夫人となるであろう。

宮殿の控の間には、いつでも宮廷の高官の地位に就くことのできる廷臣があふれている。軍隊は今のわが国の元師と同じように立派な將軍となることのできる数多くの軍人を擁している。わが国の國務大臣と同等の力をもつ書記官はどれほどの数になることだろう！ 現に執務中の知事と郡長よりも県の事務をうまく処理することのできる行政官はいかばかりであろうか？ わが国の裁判官と同じように立派な法律家である弁護士はどのくらいいることだろう？ わが国の枢機卿や、大司教や、司教や、副司教や、司教座聖堂参事会員と同じように有能な司祭はどれほどになるであろうか？ 貴族のように暮している一万名の所有者についていえば、かれらの後継者はかれらと同じようにサロンの主人役を務めるのに、どんな修業も必要としないであろう。

フランスの繁栄は学問、芸術、工芸の進歩の働きかけによってしか、またその結果としてしか達成されることがで

きない。ところでフランスの諸公、官廷の高官、司教、元師、知事、無偽徒食の所有者は直接には何ら学問、芸術、工芸の進歩のために働いていない。この進歩に貢献するどころか、かれらはそれを妨げることしかできないのである。

なぜならかれらは、これまで臆測的な理論が実証的な知識にふるってきた優越を長びかせることに努めているからである。かれらは、現にそうしているように、学者、芸術家、アルチザンからこれらの人々が受けてしかるべきである第一等の尊敬を奪うことによって、必然的に国民の繁栄を妨げるのである。直接には学問、芸術、工芸に役だたないような具合にかれらの金銭的手段を用いるので、かれらは国民の繁栄を妨げるのである。かれらは、毎年、国民が納めた税金から俸給、年金、賞与、手当等の名目で総額三、四億の金を控除し、この金を国民にとって役にたたないこれらの仕事の報酬にあてるので、国民の繁栄を妨げるのである。

これらの仮定は今日の政治の最も重要な事実を明らかにする。これらの仮定は、この事実をそれが及ぶ範囲の全体にわたって、しかもそれをただ一瞥するだけで見渡せるような見地にわれわれを置くのである。これらの仮定は、社会組織がほとんど完成されていないこと、人々がまだ暴力と策略によってみすみす支配されていること、人類が（政治的にいえば）まだ不道德の淵に沈んでいることを、間接的であるとはいえ、はっきりと証明するのである。

なぜなら、その仕事が社会にとって実証的な有用性を有し、また社会にとってほとんど負担にならない唯一の人々である学者、芸術家、アルチザンが、多かれ少なかれ無能な旧習墨守の人であるにすぎない諸公と他の統治者に従属させられているからである。

なぜなら、尊敬と他の国民的な報酬の配分者がかれらの優越を享受できるのは、概して、出生の偶然や、追従や、陰謀や、他の感心できない行為のおかげにすぎないからである。

なぜなら、公務の管理に責任を負う人々が毎年かれらの間で租税の三分の一を分け合い、しかもかれらが個人的には横取りしない税金の三分の一は、統治される者に役だつような具合には使用しないからである。

これらの仮定は現在の社会が真に逆立ちした世界であることを教えてくれる。

[25] なぜなら、貧者は富者に対して寛大でなければならぬこと、したがって最も生活の苦しい者が毎日かれらの必需品の一部を我慢して大所有者の不要の富を増やしてやるのだということを、国民が根本原理として承認したからである。なぜなら、最大の罪人、一般的な泥棒、市民の全体を搾取して、かれらから年に三〇四億をまきあげる人々が社会に対するささいな軽罪を処罰させる役目にあたっているからである。

なぜなら、無知、迷信、怠情、金のかかる快楽趣味が社会の最高の首長たちの持前をなしており、有能で、つましく、勤勉な人々は下っ端、道具としてしか用いられないからである。

なぜなら、一言で言えば、あらゆる種類の職業において、無能な人々が有能な人々を指導する役目に任ぜられているからであり、道德の観点からすれば、最も不道德な人々が市民に徳をしつけるよう求められているからであり、配分的正義の観点からみると、大罪人が軽罪人の過失を罰するために任用されているからである⁽¹⁾。

(1) オランダ・ロドリグが一八三二年に「サンシモンの寓話」と題して出版し、その後数回にわたって同じ表題で再版されたのは、以上の一〇ページ分である。オランダ・ロドリグは一八四八年に「ある死者の言葉」の名でそれらをもう一度再版に付した(編注)。

[26] この抜粋はきわめて短かいものですが、政治体が病んでいること、その病いが重くかつ危険であること、政治体の全体とその構成部分のすべてがその影響をこうむっているのだから、それは政治体がこうむる恐れのある最も厄介な

病いであることを、われわれは十分に証明したと思います。この証明は他のすべての証明に先んじなければなりません。なぜなら健康な人々（あるいは健康だと思っている人々）は、かれらを快癒させるのに適した治療薬や食餌療法を提案する医者のお話を少しも聞こうとは思わないものですから。

第二の抜粋では、われわれは病人にどんな治療法を施したらよいかを検討するでしょう。

[27] 著者からかれの同胞へ⁽¹⁾

(1) 次の第二の手紙では、わたしは、第一の手紙で用いた *concitoyen* [同市民] という表現のかわりに *compatriote* [同国民、同胞] という表現を用いることにします。その理由は、*compatriote* という表現が明らかに国王を含んでいるのに対し、*concitoyen* という表現には国王が含まれていないとみなすことができるからであり、またわたしはこの手紙で述べられる事柄を他のすべてのフランス人よりも国王に対して提出しているのですから。

第二の手紙

同胞諸君、

この第一の抜粋を読んだ後、諸君は恐らくわたしが政府の首長たちに対して敵意を抱いていると想像するでしょうが、そんなことは全くありません。そして諸君がわたしの言うことをこの方向で受けとるとしたら、これは全く遺憾なことです。この点に関して疑惑の余地が全くなくなるようにするために、これから前もってわたしの意見の全体を諸君に説明しておこうと思います。この説明の結果、わたしの意図が誰に対しても敵対的でないこと、反対にそれがきわめて平和的であり、万人に対してできる限り好意的でさえあることが判明するでしょう。

諸国民の起源の研究に従事した歴史家は、すべての民族が最初は人喰い人種であったことを確認しました。

ギリシャ人とローマ人の習俗と慣習をわれわれに知らせた歴史家は、（人身御供がまだ行われていた）この「人喰いの」時代のすぐ後に、人肉を喰うという考えが社会にきらわれるようになり、万人がそれに反抗さえするようになったことを確認しました。

したがってすでに大きな変化が起っていたのでした。原始未開の時代に存在していた事物の秩序がすでに完全に消滅していたのでした。

ローマ時代には、最も重要な公務は、「生贄として」聖別された若鶏の臓腑の検査と鳥の飛翔の観察にもとづいて決定されました。

キリスト教が打ちたてられて以来、鳥占僧と腸卜僧は姿を消し、社会が新しい基礎の上に再建されました。中世期には、犯罪の容疑者は神の審判に委ねられました。かれらは水や火による神明裁判にかけられました。神学が諸科学のなかで最も重要で最も有用なものとなされていました。教皇が（当時の基本法に従って）諸国民の業務を管理する責務をになう人々を破門したり、解任したりする権力を賦与されていました。

この野蛮な法律は放棄されました。教皇の至上権は、それがもはや承認されなくなったという理由で、存在しなくなりました。そして中世に支配的であった観念はもっと誤りの少ない観念によって置き替えられました。だから、ド・ボナールとシャトーブリアンの両氏がかれらの徳性のために大いに尊敬され、才能と学識に富む人物とみなされるにもかかわらず、一般的には常識のない人物とみなされるのは、知識の進歩によってその欠点が暴かれてしまった事物の秩序をかれらが再興しようと努めているからなのです。

前世紀の間に、全ヨーロッパ、とりわけフランスで、政治に関して一般的な意見が形成されました。このことの結果として、ヨーロッパの諸国民の業務がそれまで余りにも高価に管理されてすぎていたと判断されるようになりました。同じくこのことの結果として、政府が持つてしかるべきである権力よりもはるかに広汎な権力を賦与されているとみなされるようになりました。世論は社会的無秩序が生みだされるのはこれらの二つの原因のためであると考えました。ここで社会的無秩序とは、統治者が人民のために、また人民に最も利益になるように一般的な業務を管理する代りに、自分のために、自分の得になるようにそれらを管理するという奇怪な事態のことなのです。

われわれは、統治者の権力が縮小され、ヨーロッパの諸国民がかれらの業務の管理費用として同意する額が著るしく切り詰められるであろう、と期待すべきではないでしょうか？ 要するに、今日まで存在している公務の管理の形式が全面的に変えられ、それが完全に廃棄され、結局はそれが、人喰いの風習や、腸ト僧と鳥占僧の決定に対する信仰に基礎をおいていた政治体制や、中世に存在した政治体制等々と同じ運命をこうむるであろう、と期待すべきではないでしょうか？⁽¹⁾

(1) 注意しなければならない、きわめて本質的な事柄が二つあります。

一つは、一八世紀の哲学者の批判は人間よりも事物に、統治形態よりも政治体制の根本原理に重点をおいていたということです。かれらが主として望んだ変化は、それによって国民が臆測的な学問よりも実証的な知識に、無為徒食の人々よりも勤勉な人々に、かれに夢想しか語らない人々よりもかれのすべての欲求を満足させてくれる人々により多くの信頼を寄せることになるような、そうした変化でした。結果的には、かれらの生活に君臨していた統治形態が何であれ、また公務の管理にあたる人々が誰であれ、かれらはほぼ同じ事柄を語っていたわけです。

もう一つの重要な注意事項は、革命が一八世紀の哲学者によって与えられた偉大な方向をまだとっていないということです。

というのは、革命はこれまで事物よりも人間に、体制の原理よりも統治形態にずっと多くの関心を払ってきたからです。わたしは次の手紙ではこの二つの觀察に専念するつもりです。

[1] この箇所は『組織者』(O. S. E., XX, p. 30. ligne 17) 本文では *et en* となっているが、後に O. S. E., XXII, p. 236 などで訂正された。

[31] 現在の革命の真の原因が被治者の抱いている次のような願望にあることは、明白ではないでしょうか？すなわち被

治者は、統治者の権力を制限し、かれらが得ている法外な尊敬を下落させ、かれらが自分たちの仕事の報酬として受けている額を削減することを望んでいるのです。なぜなら、統治者が社会に対してなす貢献に比較して、かれらの仕事の報酬が余りに高すぎると被治者は判断しているからです。

最後に、被治者がかれらの目的を達した後でなければ、革命が終結されず、平穏が回復されないことも、明らかではないでしょうか？

[32] これまでに知られているすべての世紀の経験は、人類がいつもその境遇の改善に努めたこと、したがってその社会組織の完成に努めたことを証明しました。このことから判断すれば、社会秩序の維持を目的とする諸制度を、同じ目的を有するが、それ以前の諸制度よりも被治者にとって居心地がよく負担も少なくするような具合に工夫された新しい制度によって置きかえながら、その政治体制を限りなく完成していくことが、人類の本性にかなっているということになります。

同じく過去の諸世紀の経験は次のことを証明しました。社会組織におこなわれた完成の一つ一つが危機を生みだしたこと、あるいはむしろそれぞれの完成は一大政治的危機の帰結であったこと、(人々が啓蒙されることが少なけれ

ば少ないだけそれだけ長びいた）これらの危機のそれぞれは、完成を實現する手段が発見され、実行に移されるまで続いたことを。わたしが今述べたことを証明する諸事実はすべての学識ある人々の脳裏に深く刻まれています。

[33] 最後に、この同じ一般的経験は、さらに、わたしがいま述べた危機のそれぞれが同じ徴候によって予告されていたことを証明しました。根本的な諸制度が公衆の嘲笑の的となっていたのです。実際、キリスト教が樹立されはじめたのは、キケロが、どうして鳥占僧同士が顔を見合わせても吹き出さずにいられるのか理解に苦しむと語った直後のことでした。だから、公衆に一部分ずつ提示しようと企図しているこの研究を概説するにあたって、わたしは、現在の諸制度が被治者の獲得した知識よりも全くおくれていること、それらの制度は事実公衆の嘲笑の的であるし、またそうなるに値することを証明することから始めなければならなかったのです。

確かにわたしは原理にもとづいてしか論を進めることができなかったでしょう。しかしこのやり方をすれば、わたしは必然的に抽象的で冷やかになってしまったことでしょう。わたしは（できるだけ浮彫りにしなければならない）真理をごく少数の人にしか理解してもらえなかったことでしょう。

同胞諸君、これが、わたしをして、一方では統治者の原理に対立する原理にしたがって、被治者の能力ならびにかれらが公の事柄に対してなすサービスの有用性を、他方で、統治の地位への選抜の方式や、これらの平面が要求する能力や、それらを占める人々がなすサービスやを、対照的に提示するように決心させた事情なのです。しかし、わたしには諸公の美德と才能も、大臣の功績も、他の公僕的能力をもけなす意図は全くないことを正式に表明します。わたしが攻撃しなかったのは制度だけです。要するにわたしが目的として目ざしたのは、わたしが述べた二つの重大事実、つまり一つは社会がまだ不道德の淵に沈んでいること、もう一つは現在の社会組織が逆立ちした世界から成りた

っていることを、誰もが理解できるようにすることでした。

重大な政治の真理、現在の状況のなかでそれに注目することが大切である唯一の真理、それは、臆測の学を修めることに多かれ少なかれ成功した人々が実証的な仕事に専念する人々を指導する責務を担っているということ、前者が後者に国民的な報酬を配分する責務、したがって自分たちが全く有しない種類の能力を判定する責務を担っているということ、前者が全く歩んだこともなく、全く知ってもいない道に後者を導びいていく責務を担っているということであります。このことが統治者をして、わたしが諸君に言うとおりのことをしなさい、わたしがするとおりのことをするようによく気をつけなさい、と説く伝道師の立場におくのですし、このことが社会をして、太陽の光線を反射する鏡が光源であること、要するに太陽を照らすのが月であることを承認した場合と同じように、誤った推論の方向におくのです。

[35]

同胞諸君、もしもわたしが自分の考えをこんな風に表現していたならば、わたしの作品を読む人は五〇名もいなかったであろうことを諸君は納得するでしょう。したがってそれは、社会に活発に働きかけるためにも、社会を脅かしている不幸について社会の目を開かせるためにも、またこの不幸から身を守るためにとるべき方策を社会に知らせるためにも、ふさわしい手段ではなかったのです。

これをもってわたしの政治に関する一般的見解の最初の概説を終わります。次の手紙では、この見解をもっと正確に、もっと詳細に示すことになるでしょう。

追伸。わたしが第一の抜粋で諸君に示した考察は、国民の首長だけを対象として書かれたものであり、人民を動揺させることをいささかも意図してはいないことに注意して下さい。

同胞諸君、この国の国民は全く異なる二種類の首長をもっています。すなわち、一方で、実証科学の首長、芸術の首長、工芸の首長をもっています。他方で国民は、その軍事的首長、神政的首長、行政の首長をもっています。

[36] わたしの研究の目的は、公けの事柄の最大の利益のために、これら二種類の首長の間に存在しなければならない従属関係が何であるかを検討することにあります。

第三の手紙

わたしはこれから次の二つの問題に答えようと思います。

われわれは何をなすべきであったか？

われわれは何をなしたか？

これらの二つの問題に対するわたしの回答はわたしの意図について誠実な人々を完全に安心させるだろうと思います。また、かれらがわたしの目的を熟知するので、わたしは以下の分冊で、誰にも不安を与えずに、またわたし自身もどんな種類の不安をも感じることなしに、わたしの諸原理を展開し、それらからいくつかの結論をひきだすことができるだろうと思います。

わたしはわれわれがなすべきであったことの検討を「以下の」四つの手紙に分割するでしょう。その理由は、われわれがなすべきであったのになさなかった事柄が四つあり、それらはいずれもわれわれが別個に注意を集中するだけの価値があるからなのです。

[37] われわれは最初に、われわれがそれから解放されたいと望んでいる政治体制と、われわれの知識の状態が要請している社会体制とに関して、われわれの観念を明確にしておくべきだったでしょう。われわれは、何らかの行動を起す前に、双方について十分に明晰な観念を作りあげておくべきだったでありましょう。これは困難ではありませんでした。なぜなら、これからわたしがするように、われわれはこれら二つの観念のそれぞれをほんの数語で言い表わすことができるからです。

旧い政治体制（まだ力をもっているが、われわれがそれから解放されたがっている政治体制をこう名づけたい）は中世に生まれました。全く性質の異なる二つの要素がその形成に協力しました。この政治体制は、最初から、またそれが存続する限り、神政的体制と封建的体制の複合体でした。（ほとんどが軍人によって所有されていた）物質的な力と、司祭によって発明された策略と奸計の手段との結合が聖職者の首長と貴族の首長に最高権力を賦与し、残りの住民のすべてをかれらに隷属させたのでした。

[38] この時代にはもっとよい体制を樹立することはできませんでした。なぜなら、一方で、われわれが当時もっていた知識のすべてはまだ皮相でしかも曖昧だったから、一般的な形而上学だけが中世のわれわれの祖先にとって指針として役だつことのできる諸原理を含んでいたからであり、したがって一般形而上学者が社会の学問的業務を指導しなければならなかったからです。

他方で、この野蛮時代には、一大国民が豊かになるための唯一の手段は征服を行なうことだったので、軍人がそれぞれの個別国家の国民的業務の指導にあたらねばなりませんでした。

したがって、旧い政治体制の根本的土台は一方では無知の状態だったのです。その結果、社会の福祉を保証する諸手段についての推論は観察の裏づけを欠くことになり、単なる臆測によるしかなくなってしまいました。

そして他方で、（労働によって原料を改良することによって、富を生みだすことを諸国民に許さなかった）工芸の未発達な状態のために、諸国民にとって、他国民が所有する原料を奪い取る以外に豊かになる手段は残されていませんでした。

[39] 産業の進歩の結果として、諸国民は平和的労働によって豊かになりながら、同時に繁栄する手段を手に入れたのでした。

他方で、実証的な知識が獲得され、あらゆる種類の現象が観察されました。そして経験に基礎をおく哲学が、今日では、形而上学よりもずっと確実に諸国民を道徳と福祉の方向に導びくことのできる諸原理を含んでいます。

こうした事態の結果として、新しい政治体制を創設する手段が、したがってその必然性が生まれているのです。したがって新しい体制の根本的土台は、一方では、他者にとっては有用で自分にとっては利益になるような具合に自分たちの力を使用する諸手段を人々に与えている、文明の状態です。

そして他方では、知識の状態です。これによって社会は、自分の境遇を改善するために使用しなければならない諸手段をわきまえながら、原理にしたがって自らを導びくことができるようになりましたし、また、社会にとって、自分の業務を管理する役目に任ぜられる人々に専制的な権力を委ねる必要ももはやなくなってしまうのです。

[40] 体制の相違の基本となるものは、権力の分割における相違ではありません。それは、統治者が被治者に行使する権力の本性と量における相違なのです。

あらゆる統治形態があらゆる政治体制に適用可能なのです。⁽¹⁾

(1) だからといって、統治形態と権力の分割の方式はどうでもよいとはいいたいわけではありません。わたしはただ、これらの事柄には二次的な重要性しかないと言おうとしているのです。

統治者が社会における最も重要で、最も有能で、最も有用な人々とみなされる限り、社会の首長にかねらの重要性和権力を増大させてやるために莫大な報酬が与えられる限り、国民が自分の道徳を改善し、自分の平穏と繁栄を保証するために、採用した方がよいと判断される諸手段を選択する役目をかれら「統治者」に託する限り、社会の首長が一方で形而上学者の階級(すなわち、いまだに盲目の信仰に服従しており、しかも皮相な知識しか持たないので、一般的事実について議論したがる人々)の中から選ばれ、他方で軍人の階級(人間同士の闘争の手段を完成すること、自分の最も高尚な仕事と心得ている人々)から選ばれる限り、社会は依然として旧体制に拘束されたままであります。社会が採用する統治形態が何であれ、この形態が共和政的であれ、貴族政的であれ、統粋君主政的ないしは立憲君主政的であれ、社会は依然としてこの体制に従属し続けるでしょう。社会がその軍事的首長を封建家族の相統人の中から選ぶ場合には、かれらを農奴の子孫の階級の中から選ぶ場合や、学問の分野の首長が神学者の中から選ばれたり、法律学校に自分のゼミナールを開設した形而上学者の中から選ばれる場合と同じように、社会は依然として旧体制に従属し続けるでしょう。

次のような時代にならないと、国民は自分が獲得しなければならない新しい政治生活の出発点に置かれたことにはならないでしょう。すなわち、国民がこれまで従属し続けてきた社会体制の不道徳性と奇怪さを余すところなく明瞭に自覚するようになる時代。貴族と聖職者が国民を搾取して自分たちの利益を計るために使用した暴力と策略の手段の結合に目ざめて、国民が、この古い機構を全面的に解体し、聖なる道徳と真実の哲学の中から取りだされる諸原理にもとづいて構想され・組織される新しい機構によって古い機構を取り替える決心をするようになる時代。国民の首長が軍人と形而上学者の中から選ばれる限り、政府が必然的に専制的となるであろうこと、また統治者が社会によって国家の最も重要な人物、社会に最も役だち、それ故に最大の尊敬に値する人物とみなされる限り、統治者は必然的に専制君主となるであろうことを国民が認識するようになる時代。最後に、（国民の繁栄は学問、芸術、工芸の進歩の結果としてしか生じえないという思想を確固たるものにして）国民が学者、芸術家、アルチザンを自分に最も役だつ人々、したがって最高度の尊敬を与えねばならない人々とみなすようになる時代にならないと。この人類にとって幸福な時代になると、統治者の職務は縮小されて本質的に学校の学監の職務と大差のないものとなってしまふでしょう。学監は秩序維持の役目しか担当しません。生徒達の勉強の指導を任されるのは教授達です。国家においても同様でなければなりません。学者、芸術家、アルチザンが国民の労働を指導しなければなりません。統治者は労働が妨害されないようにする役目にしか携わるべきではありません。

同胞諸君、お望みなら、諸君はわたしがいま諸君にゆだねた思想の政治的価値を直ちに評価することができます。（諸君が置かれた観点から）一七八九年以降に行われたこと、およびいま人々が没頭している事柄を考察する労をとって下さい。そうすれば諸君は次のような判断を承認することでしょう。もし危機の開始以来直ちに、国民がかれ

の実証的知識の進歩にとって最も有利な社会組織を採用すべきであるということを一般的原理として承認していたなら、ロベスピエールがサンキュロットにフランスを支配させることは決してできなかったでありましょう。というのも、最も無知な階級が学者、芸術家、アルチザンの労働を指導できないことは、単純な良識がこれを国民に証明したでしょうから。同じ理由でボナパルトは軍事政府を樹立できなかったでありましょう。なぜなら、消費者である軍人が産業の労働を指導するのに全く適さないことは明らかだったでしょうから。最後に、今日、無為徒食の所有者と産業の首長のいずれが選挙に最大の影響力を及ぼすべきかを、国民が改めて問題にすることもなかったでしょうし、内閣の構成が重大事とみなされることもなかったでありましょう。

S. — S.

第四の手紙

現在の知識水準をふまえて国民の圧倒的多数の政治的要求を満たすことのできる体制をはっきりと概念化するところまで高まった後で、われわれは次のように論を進めるべきだったでありましょう。

われわれはこう言うべきだったでしょう。新しい体制を直ちに樹立することは明らかに不可能であるから、またこの体制が実現可能となる前にそれを準備し・組織しておくことが必要なのだから、われわれが旧体制を完全に廃棄することができるようになるまで、われわれは、旧体制から離脱しないで、できるだけ負担にならない方法で生活する

[45]

ことに努めるべきである、と。

したがって、われわれが一七八九年に専念すべきであった第二の事柄は、次の問題を解決することではなければならなかったでしょう。

旧体制の不都合が最も少なくなる組織化の方法は何だろうか？

この問題の解決をみつけることは困難ではありませんでした。なぜなら、旧体制のうちで最もましな社会組織がイギリスの政体、すなわち議会制度であることは、経験がそれを証明していたからです。

経験がそれを証明したといえますのは、イギリス国民がこの統治形態を採用して以来、この国民は他のいずれの国民よりもはるかに急速に繁栄したからです。

したがって、われわれがなすべきであった第二の事柄は議会制度を採用することだったでしょう。

S. I S.

[46]

第五の手紙

イギリスの政体を臨時の体制として、過度的な政体として、新しい社会機構の建設を順調に行なうために築く必要のあった一種の橋頭堡として採用することが、したがってわれわれのなすべきであった第二の事柄なのです。

この政体を改善する手段を見つけることが、われわれが専念すべきであった第三の事柄です。そしてこの政体に加

えられねばならない重要な改善がみつかることは確実だとわれわれは考えるべきでした。なぜなら、この政治の仕組みが実施されてから一世紀以上が経過していたからですし、今世紀はすべての世紀のうちで人々が最も政治に没頭した世紀であったからです。

したがって、イギリスの政体が受け入れることのできる最も重要な改善は何かということが、われわれが解決を求めるべきであった第三の問題なのです。

[47] イギリスの政体はある根元的な欠陥によって汚されています。もしわれわれがこの政体を分析する労をとっていたなら、われわれはきわめて容易にそれに気づいたでしょうし、また容易にそれを是正していたことでしょう。この欠陥とは下院の構成が誤っていることです。

租税を議決するのは下院です。したがって、下院が租税をできるだけ軽くすることに個人的な関心を有する人々によって構成されることが、国民の利益になります。ところが、イギリスの下院議員の圧倒的多数は租税の軽減よりもむしろその引上げに関心があるのです。

これらの下院議員の大多数は役人です。そして役人は政府の願望をかなえざるを得ません。さもないとかれらは職を失うか、少くとも昇進「の機会」を奪われてしまいます。かれらが内閣に直接従属していることを別にしても、かれらの共通の利害がかれらをして政府が自由に使用できる莫大な金を持つことを望むように仕向けます。というのは、かれらの収入のうち俸給から成る部分は、必然的に租税の税率と比例しているからです。

[48] 下院議員のうち役人でない人々は大部分が無為徒食の所有者です。かれらは自分たちの収入と尊敬を増すために政府に地位を得ることに熱心です。したがって、かれらも、とるに足らない微妙な差異を別にすれば、役人と同じ立場

にたっているのです。

イギリスの下院の構成が誤っていることを承認した後、われわれはわが国の下院の構成をもっとよいものにする手段を探すべきだったでしょう。そして、もしそれを探していたなら、この手段は容易に見つかったことでしょう。なぜならそれはごく自然に心に浮んでくるからです。chambre des communes〔下院Ⅱコ、ミュヌの議会〕という表現がはっきりとそれを指示しております。

〔49〕 下院はコミュヌの主要な成員によって構成されねばなりません。すなわち下院はさまざまな分野の産業労働の首長たちによって構成されなければなりません。なぜなら産業労働の首長は、国家支出の節約に最も関心があり、専制に最も反対する市民だからです。かれらがそうなる理由は、租税はかれらの利益に転化することができないからですし、かれらは専制権力を行使することができないからです。かれらが指導する労働から得られる成功によって、かれらの財産を保全し・増加させるという責務のために、かれらはすべての時間をとられてしまい、政府の地位を引受けることができないのです。

したがって、三番目に、われわれは下院がすべての産業部門の首長から構成されるようにして、議会制度を改善すべきだったのです。⁽¹⁾

(1) コミュヌが買い戻された時代には、都市にはアルチザンしかおりませんでした。耕作はまだ揺籃期にあって、聖職者とともにフランスの国土のほぼ全体を占有していた領主が、かれらの領地の経営に使用されるささやかな農耕用動産の所有者でした。この時代以来、とくにロワール河北部の諸県では、この点に関して事態が大いに変化しました。小作地を借りて、それら自分の動産で経営するアルチザンの一階級が形成されたのです。産業者のこの階級がすべての階級のなかで最も重要になりました。この階級が下院で最も重要な役割を果たさなければなりません。

これまで政治の分野でなされてきたように、所有者と耕作者を混同してはいけません。所有者を作るには契約ないしは征服だけでこと足ります。耕作者を作るには動産と能力が絶対に必要です。

いまだに土地所有者に有利な一つの偏見が存在しており、これが文明の進歩を大いに遅らせています。多くの人々は、土地所有者の唱える、自分たちが秩序の維持にもっとも関心のある社会階級なのだという主張を真にうけておりますが、この主張は絶対に誤っています。なぜなら無秩序から最大の害をこうむるのは耕作者だからです。穀倉は略奪され、馬は厩舎から連れ去られ、雌牛、豚、羊は食われてしまいます。土地は根絶することも持ち去ることもできないのに、借地農は数時間で破滅させることができます。借地農はかれらの資本を失なうという危険を冒しているのに対し、所有者はかれの収益しか危険にさらしません。

[50]

第六の手紙

いま述べた三つの事柄が実行されていたならば、われわれは新しい政治体制の樹立に着手することができたでしょう。なぜなら新しい下院の構成によって、下院は現在の知識水準が要求する社会組織を樹立するのに役立つものに変えられたでありましょうから。そして租税を議決するのは下院ですから、下院は最高の政治権力を賦与されているのです。⁽¹⁾

(1) 租税議決権が排他的に下院に帰属するという事実から、下院が最高の政治権力を賦与されているという結論がえられます。なぜなら、政府は金なしには何事もなしえないから、下院は、自分の好きな条件でしか政府に金を渡さないことにしながら、自分の望む義務を政府に課することができるからです。

わたしはこれから（前の手紙で述べたように、産業の首長によって構成される）下院がたどるべきであった歩みを説明しようと思います。わたしの考えをもっと断固たる形で、もっと速かに説明するために、下院に代弁してもらうことにしましょう。

[51]

《創案院（*Chambre d'invention*）と名づけられる第一議会が形成されるであろう。》

《この議会は三〇〇名の成員から成り、三つの部会に分割されるであろう。三つの部会は別個に会議をもつことができるが、それらの仕事は公式の性格をもつのは、三つの部会が共同で審議する場合だけであろう。》

《各部会が三部会合同の総会を召集する権限をもつであろう。》

《第一部会は二〇〇名の土木技師によって構成されるであろう。第二部会は詩人ないしは他の文学の作家五〇名によって構成され、第三部会は二五名の画家、一五名の彫刻家、一〇名の音楽家から成るであろう。》

《この議会は次の仕事に専念するであろう。》

《この議会は、その創立第一年度の期末に、有用性と快適さのすべての点でフランスの富を増加させ、その住民の境遇を改善するために企画されねばならない公共事業計画を提出するであろう。次にこの議会は、毎年、当初計画に何を追加すべきか、それにどんな改善の余地があるかについて、意見を述べるであろう。》

[52]

《干拓、開墾、道路の開通、運河の開鑿がこの計画の最も重要な部分とみなされるであろう。建設されるべき道路と運河は、ただ単に輸送を容易にする手段とみなされるべきではないであろう。それらの建設は、できる限り旅行者を楽しませるような具合に工夫されねばならないであろう。⁽¹⁾》

（1）（さらにもしそれが適切と判断されるならば）、道路や運河が通る最も風光明媚な用地の中から五万アルパンの土地が選ば

れるであろう。これらの土地は、旅行者にとっては保養地として、近隣の住民にとっては休日の行楽地として役だつように、運用されるであろう。

これらの観光地のそれぞれには、周辺地域の天産物と工産物の博物館が置かれるであろう。またそれらにはそこに滞在することを欲する芸術家のために住居が設けられるであろう。そして、国民の最大の福祉のために状況がその発展を求めている情念を地域の住民に燃え立たせるために、一定数の音楽家がいつもそこで扶養されるであろう。

フランス国土の全体が、芸術が自然の美につけ加えることのできるすべてのものによって飾られた、荘麗なイギリス風庭園とならねばならない。長年にわたって奢侈は、国王の宮殿や、諸公の邸宅や、少数の有力者の館と城の中に集中されている。この集中は社会の一般的利益にとってきわめて有害である。なぜならこの集中は、二つの異なる文明の度合い、二つの異質な人間の階級、つまり芸術作品の日常的な観賞によって知性を発展させることのできる人々から成る階級と、かれらがもっぱら従事している物質的な労働が少しも知性を刺激しないので、想像力を全く発展させることのできない人々から成る階級とを固定させる傾向があるからである。

現在の状況は奢侈を国民的なものにするために有利である。国民全体が奢侈を享受するようになれば、奢侈は有用で道徳的となるであろう。

精密科学と芸術がそれらの輝かしい再生の時代以来なし遂げた進歩を、政治の仕組みの中で直接に利用する名誉と利益は、われわれの世紀に留保されたのである。

[53]

《この議会は、公共の祭りの計画から成るもう一つの仕事を提出するであろう。》

《これらの祭りは希望の祭りと回想の祭りの二種類となるであろう。》

《有能な雄弁家たち（かれらの数がきわめて多数になることは決してないであろう）がかれらの雄弁の恩恵を広く施すことができるようにするために、これらの祭は首都、県庁所在地、郡役所所在地で順番に開催されるであろう。》

〔54〕 《希望の祭においては、雄弁家が国会によって決定される事業計画を人民に説明するであろう。雄弁家は、市民がこの計画を実行する時にはかれらの境遇がどれほど改善されるかを理解させることによって、熱心に働くようにかれらを鼓舞するであろう。》

〔54〕 《回想の祭においては、雄弁家は、人民にかれの境遇がかれの祖先が置かれていた境遇よりもどれほど良いかを知らせることに専念するであろう。》

《創案院の中枢部を構成するのは次の人々となるであろう。

一、各県の主任土木技師八六名。

二、アカデミー・フランセーズの会員四〇名。

三、学士院に所属する画家、彫刻家、音楽家。》

《この議会の成員はそれぞれ一万フランの年俸を受取るであろう。》

《毎年この議会は総額一二〇〇万を自由に使用するであろう。この額は議会が有用と判断する発明を奨励するため
に用いられるであろう。第一部会が八〇〇万を、他の二部会がそれぞれ二百万を使用するであろう。》

《この議会の中枢部が自らの判断で残りの成員の補充にあたるであろう。》

〔55〕 《議会の組織化は独力でなされるであろう。すなわち、この議会が、選挙人となるために満たされねばならない諸条件と、候補者に要求される諸条件とを自分で決定するであろう。その成員の任期が五年以上にわたることは許されないであろうが、かれらは無期限で再選される資格をもつであろう。そして後任の選出については、議会は任意の方式を採用することができるであろう。》

《この議会は国民会員一〇〇名と外国人会員五〇名を準会員とすることができよう。準会員は議会に議席を占める権利と、そこで発言する権利をもつであろう。》

《〔おらに〕検討院 (Chambre d'examen) と名づけられる第二議会が創設されるであろう。》

《この議会は三〇〇名の成員によって構成されるであろう。その内訳は、有機体の物理学にたずさわる物理学者一〇〇名、無機体の物理学にたずさわる物理学者一〇〇名、数学者一〇〇名となるであろう。》

《この議会は三種類の仕事を担当するであろう。》

《それは第一議会の提出するすべての計画を検討し、それらの一つ一つについて詳細で根拠のある意見を述べるであろう。》

[56] 《それは公教育全般の計画を作成するであろう。この計画は、市民の三つの豊かさの程度の違いに対応させて、三つの教育段階に分割されるであろう。この計画は、若者が有用労働の立案・指導・執行をできるだけうまく行えるようにすることを目的とするであろう。》

《すべての市民がかれの欲する宗教を自由に表明することができるのであるから、したがってかれは自分の好みの宗教でかれの子供をしつけることができるのであるから、この議会が提出する教育計画の中では、宗教は全く考慮の外におかれねばならないであろう。》

《計画が他の二つの議会によって承認される時には、検討院がその執行にあたり、公教育を監督し続けるであろう。》

《この議会が担当しなければならない三番目の仕事は、次のような種類の公共の祭の計画となるであろう。》

《男の祭、女の祭、少年の祭、少女の祭、父母の祭、児童の祭、事業家の祭、労働者の祭。》
《これらの祭りのたびに、検討院の任命する雄弁家が、祭の榮譽に浴する人々の社会的義務について講演をするであらう。》

[57] 《この議会の成員はそれぞれ一万フランの年俸を受け取るであらう。》
《この議会は毎年総額二五〇〇万を自由に使用するであらう。議会はこの額を公立学校に必要な支出と、物理学と

数学の進歩を促すために与えられる助成金にあてるであらう。》

《検討院の組織化にあたっては、創案院と同じ条件が満たされなければならないであらう。》

《この議会の中枢部に人材を調達するのは、学士院の物理学・数学部会となるであらう。》

《検討院は国民会員一〇〇名と外国人会員五〇名を発言権をもつ準会員とすることが出来るであらう。》

《以上の二つの議会が創設されると、「次に」下院が再構成されるであらう。この時には下院は執行院 (Cambre d'exécution) と名づけられるであらう。》

《この議会は、その構成を一新する際に、産業の各部門から代表が選出されるように、また各部門がその重要性に比例した代議員数をもつように配慮するであらう。》

[58] 《執行院の成員はどんな俸給をも受け取らないであらう。産業会社の主要な首長のうちからかれらを選出する以外に方法はないので、かれらは皆裕福に違いないからである。》

《執行院は決定されたすべての計画を執行することに責任を負うであらう。この議会だけが租税を定め、それを徴収させることに責任を負うであらう。》

《以上の三院が一緒になって、新しい国会(Parlement)が形成されるであろう。この国会は立憲的にも立法的にも最高権力を賦与されるであろう。》

《三院のそれぞれが国会を召集する権利をもつであろう。》

《執行院はそれが適当と判断する議題に対して他の二院の注意を促すことができるであろう。》

《こうしてすべての議案は第一議會によって提出され、第二議會によって検討されるであろう。そして第三議會だけがそれを最終的に可決するであろう。》

《第一議會が提出した議案が第二議會によって否決されるという事態が生じた場合には、時間を節約するために、この議案は、第三議會を経由せずに第一議會に差し戻されるであろう。》

[59] 同胞諸君、今度は新しい国会が最初になすべきであった三つの事柄を諸君にお話しすることにしましょう。わたしはいま下院の名において自分の考えを述べたわけですが、それと同じように国会の名において語ることにしましょう。《すべてのフランス人(とりわけ法律家)は新しい政治体制と合致する新しい民法の体系と刑法の体系を提出するよう要請されるであろう。所有は、それを生産にとって最も有利なものにすることのできる土台の上に再建され、それに基礎づけられねばならないであろう。》

《国会に提出されるすべての議案が国民の費用で公刊されるであろう。⁽¹⁾ 国会は最良と判断される民法典と刑法典の草案を選択するであろう。国会はそれらの作者に莫大な報酬を与え、かれらの提出した法典が審議される時には三院へのかれらの出席を認め、かれらに発言権を与えてこの審議に参加させるであろう。》

(1) 議案が全部印刷されることは決してないであろう。その抜粋が公刊されるだけであろう。これらの抜粋は印刷用紙一枚

以上の内容を含んではならないであろう。

[60]

《すべてのフランス人（とりわけ軍事技師）は、全般的な国防計画を提出するよう要請されるであろう。この計画は常備軍の必要性ができる限り少なくなるように立案されねばならないであろう。これらの労作の作者は、近隣諸国民がフランス国民と同じ政治体制を採用するようになれば、直ちに、わが国土の防衛のために使用されるすべての手段が無用となり、それらが放棄されねばなくなるであろうことを肝に銘ずるべきであろう。》

《採択される計画の作者には国民的な報酬が与えられるであろう。》

《新しい政治体制の樹立によって、その金銭的利益になんらかの損害をこうむる人々に補償をするために、減債基金つきで、二〇億の借款がなされるであろう。》

《国民的報酬は次の三条件を最もよく満たす作品の作者に与えられるであろう。

一、旧い政治体制に対する新しい政治体制の優越を論証すること。

二、新しい政治体制の樹立によってその利益が侵害される人々に与えられる二〇億の補償金について、最良の配分方式を確定すること。

[61]

三、新体制の樹立に反対することに利益を有する人々に補償金として与えられる二〇億の金額は、自由な体制の平和的な樹立が国民に得させるであろう利益と比較するならば、全く取るに足らない額であることを証明すること。》

同胞諸君、これをもって、われわれが何をなすべきであったか、何をなさねばならないかに関して、わたしが考えていることの最初の概説を終ることにします。

追伸 わたしがいま素描した政体を樹立するために多くの時間を要したでしょうか？ また多くの時間を要するで
しょうか？ 次の手紙ではこの問題を検討することにしましょ^{〔1〕}う。

〔1〕 『組織者』の第一分冊・第三版はここで終わっている。